

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 151号

平成26年11月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

石館守三先生の文章より (13)

(「石館守三先生金曜会語録」より (9))

何のために一生を捧げるか

学生時代は出世、故郷に錦を飾りたい等の名誉心があった。しかし同志会生活にて先輩、牧師の話を聞いて考え方に変化を生じた。年寄りの特権は高い山に登って行くが如く天に近づいている。大学での学問の目的は何か。これは本質的かつ原初的問いである。目に見える幸福 etc. はナンセンスということは年寄りになって分かる。何のために一生を捧げるのか。これぞ mission (使命) であり、これが大学で学問をやる目的である。何をなし何を目的となすか、単に知識と technique (技術) を学ぶのではなく、真の学問、真の人生を考える。自分を産んでくれた創造者のために何ができるか、これを考えてもらいたい。

世界のライの克服のために何をなすべきかの講演を頼まれている。
聖書におけるライ病は多くの記述がある。西洋におけるライ学者曰く「ライは天罰でもなく不治の病でもない」不幸な病気になるのはだれの責任かという問いに対してイエス答えて曰く「親の罪でもない、本人の罪でもない、神の栄光を現わしたものだ」神はかくの如き悲惨な病気をして存在せしめた。神の栄光、権威を表わさんがために。考えるにかくの如き患者に献身し、怠惰な人々を覚醒せしめ、警告。我らに使命、mission を覚醒せしむるという神の偉大なる意図、はかりごとを感じる。

(昭和 56 年 4 月 24 日 金曜会)

宗教的価値を知って欲しい

筆の使い方。字は人格を現わす。時代の違いを感じる。同志会に名を連ねること。私も同志会での生活がその後の自分を作っているように思う。人生に与えられた環境、素材をどう生かすかはその人の責任である。何をしたかが問われる。

青年時代は信仰に入ったような気がするが人生を経て焼きが入る。きちんとした人生観を持った人と持たぬ人は10年後に違いが出てくる。結婚職業等でどういう規準でものを考えるかが問題である。大学では人生とは何ぞやに対する答えは期待できない。自分で求めることである。同志会の目的はどうにかして立派な人格者になって欲しいという気持ち。こういう場所を利用して探求して欲しい。Three Minimum Duty (三つの最小限の義務) 一業とする。

心の寂しさ、その世界にとどまるならばかたわ。別の価値観→宗教的なものは何かを知ろうとする。自分にとって未知の世界を知る。聖書を読む。価値判断が大切。別の世界があることを覚え、宗教的価値とは何かを知って欲しい。

(昭和 56 年 5 月 29 日 金曜会 署名式)

人生のヴィジョンを求めるべし

大学をやめて21年。残った研究をやらんがために国が研究所を設立。国立衛生試験所長に着任。伊吹山四郎先輩（昭和18）もある研究所の所長。行政権は立法権に極めて弱い。従って総理府直結となすべし。国の各種の研究機関の議（座）長に着任。代議士先生に対して国会で答弁。…

薬剤師会会長として政府にも立法府にも自由にものが言える。名誉教授など、政治のような泥臭い地位につくのはどうかという心配の声があった。しかし11年も続く。医師会は武見会長である。同志会はキリスト教の精神。社会に還元、国民優先、決してエゴが優先してはならない。真実とは何か。正しいことは何か。指導者は心掛けねばならぬ。真実ほど強いものはない。

果して何年勤められるか不安だったが11年間も続いた。損得ではなく真実で行動しなければならない。同志会において何が大切かをつかむことが肝要。偽りものは雲散し真実のものは最後まで残る。真実に立脚する。人生のヴィジョンを培う。求めるべし。真実を求める場を提供、それが同志会である。

（昭和57年2月5日 金曜日）

目に見えないものに心引かれる

大学で科学や学問を修めている。特に自然科学は日進月歩。しかし我らが同志会において求めているのは別の次元のもの。Civilization (文明) とは一体何か。目に見える世界のみを大学で取扱っている。しかし聖書、見るものは見えないものより成立っている。

見るものは一瞬の内に消え去る。永遠のものではない。この齢になって感ずるのは目に見えないものに心引かれる。目に見えるもの、物質的繁栄、経済的発展、これを進歩と称する。これが一般世間の価値観である。民主主義の原理は自由であるが、現在の日本は欲望、わがまま、自分勝手な自由が氾濫している。

実際日々の新聞にその類の記事が載っている。社会の指導者、教育者までもが価値判断、価値基準がおかしくなり出した。これは本当に心配すべきことである。要するにこれは価値判断が目に見えるものに向かっている証拠に他ならない。同志会でこの点を深く心に留めて生活をしてもらいたい。

(昭和 58 年 10 月 21 日 金曜会)

先輩の体験を聞くこと

2.26 事件については思い出が深い。助手の頃であった。出月三郎先輩も当時留学なされており、そこで会う機会もあった。

同志会の歴史について。大学からの60年の経験、その最初の3年はこの同志会であった。旧制中学のころはスポーツをやっており、勉強は2の次であった。同志会にその中学の先輩の古我源吉（大13）さんのゆかりで入会した。人生を左右したと言っても過言ではない。夢をもって赤門をくぐったが、同志会では先輩の体験談を聞いたのが最大の得るところとなった。

家が薬屋であったためただそれだけで薬学科に入った。そこでここに入っての3年間、何の為に勉強するかという問いかけ、今の青年は刺激が多く何をやっていいのか分からなくなることもあるが、当時は勉強しかなかった。

だがここで別の薬学以外の価値観があることを知った。金曜会で祈り耳を傾けた。キリストの示す人間像、神の愛をここで学んだ。聖書は生死の境の時に読んでわかるのではなかろうか。先輩の体験を聞くこと、これで安心して社会に出て行くことができた。

（昭和59年5月11日 金曜会）

自分の一生を何に捧げるか

今年7名の入寮者がいてまた自然科学系が多い。自分のことを思い出すと入寮当時はキリスト教を信仰するかどうかも分からなかった。自分の一生を何に捧げるかということに強い関心があり、そういう集会にはよく参加したが、大学の勉強には失望した。人間は生物学者に言わせると生物であるが、私は考えてしかも神を求める生物であると思う。同志会は求道者のための寮であると思う。ここで真理を求め、人間とは何かということに対して教えを受ける。神の名によって建てられた求道者を世話する家庭である。大事なことは大学の講義のような切り売りの知識を受けるだけでなく、これを隣人のため、人類のために捧げるように学問をすること、少しでも自分の一生をそれに捧げるという意識と喜びがないと学問は駄目である。

自分の一生を何に捧げるかということをよく discussion (議論) して行くことが必要である。今年米寿となるがその記念の本を内会員に捧げたい。参考にして頂ければ幸いです。偶然の同志会との交わりが皆にとって重要な意味があるように。

(昭和 63 年 5 月 20 日 金曜会 署名式)

〔付録〕 石館守三先生の業績について

石館守三先生は、高円寺東教会で月1回礼拝において証言を担当されましたが、ご自分の業績についてお話しになられることは、誠に少なかったのであります。『石館守三先生金曜会語録』に収められている、平成5年5月15日中野サンプラザで開かれた石館守三先生感謝会における磯野健太郎理事長のあいさつの中に、石館先生の業績について要約的に説明されていますので、その関係部分を引用紹介致します。

磯野理事長ごあいさつ（抄）

石館会長先生は満92歳のご高齢にもかかわらず、お元気でいらっ
しゃいます。…私は主として石館会長の輝かしいご功績の紹介と、
同志会に対する貢献をお話ししたいと存じます。キリスト教の謙遜
の美德のため、会長はご自分の業績などを喧伝されず、専門以外の
方はほとんどご存じないと思われます。ことに会長が同志会に対し
てなされた、経済的ご貢献などについては、あらゆる所で全く触れ
られておりません。…

先生は青森市の薬屋さんの息子さんとして明治34年1月24日お
生まれになりました。青森中学を卒業した時、お父様にもう帰って
家の手伝いをするかいと申し上げたら、まだ少し勉強しても大丈夫
と言われたので、薬屋になるにはどこへ行くべきかという事で、二
高の理科へ入ったとの事でした。二高を卒業して、もう家へ帰って
家の手伝いをするかいと又申し上げたら、まだもう少し勉強しても

大丈夫と言われたので、薬屋になるために、東大の薬学科にお入りになったとお話しになりました。

大正14年3月ご卒業となり、厳格なお父上は家業を継いでくれる様に期待されていた由ですが、朝比奈康彦という偉い先生に見込まれて、研究者の道を歩むことになりました。朝比奈先生は、「顕微鏡1台と一握りの植物材料さえ与えられれば、たとえ一生牢獄生活をして悔いなし」という位の素晴らしい学者であり、この恩師によって石館先生は「実在に対する強い情熱と深い憧憬」に目覚めさせられたとのことでした。

さて漢方薬の樟脳は古くから心臓の薬として用いられ、西洋医学でもこれから抽出したカンフル注射が汎用されました。しかし高度の重病人にこれを用いると、かえって心臓に悪く働くことが分かってきました。数分の時間を経て体内でこれが何か別の物質に変わると、心臓を強める良薬になるらしいというのです。「これを研究して見なさい」と卒業してたった2年の石館先生に恩師朝比奈教授から白羽の矢がたてられたのです。それから先生の死にものぐるいの研究が始まり、頓挫挫折の繰り返しというか、言葉に尽くせない紆余曲折の後に、カンファが体の中で他の物質に変わって害のない強心

剤となる事をつきとめ、その物質をビタカンファと命名されました。そうして商品化に成功して、昭和7年に武田薬品から発売されたのです。以後30年にわたりビタカンファは、全国の医師によって愛用されました。…

ところが全国の医師が患者さんにビタカンファの注射をする度に、武田薬品を通じてビタカンファの報奨金として、石館先生にお金が出る様になりました。その結果、先生は桁はずれのお金持ちになりました。そうしてそれを惜しみなく、危機に瀕していた同志会に注いで下さったのであります。

その後昭和11年、ヒトラー治下の風雲急なドイツに留学されました。ベルリンオリンピックの年で、行かれた先はハイデルベルクとウィーンでした。遠く故国を離れて、ある時は物思いに沈んでネッカー川岸の散歩もされたし、又ある時は新調のタキシードを着込んでフルトヴェングラー指揮のオーケストラを聴きにも行かれたそうです。ここで2年間にわたって世界の碩学に親炙されて、多くの知己をえられ、帰朝されて昭和14年助教授、昭和17年薬品分析化学講座が新設されるに当たり、主任教授とされました。

ビタカンファの他に、我々門外漢にも有名な先生のご業績としては、ハンセン氏病（らい病）の治療薬プロミン、がんの治療薬ナイトロミン、発癌物質や肝臓の薬グロンサンのご研究などがあります。

青森市にも、らいの療養所があつて、子供の時から、先生はこの不治の病に悩む患者に深い関心を寄せられました。卒業して程なく、同じ薬学を志すなら、人が敬遠するこの病気の薬の研究をして、少しでも彼らを慰めることが出来たら、そして周囲が許したら、この病院に勤めても悔いがないと考えられ実行されようと思つた。それを先輩の説得でやっ取り止めたことがあつた由です。結核の化学療法剤の研究をされていて、結核菌とらい菌が似た反応を示すことから、プロミンという薬を初めてらい病の治療に用いようと、多摩全生園の林園長にその試験を依頼されたのだそうです。しかし過去の失敗にこりて中々実験台になる患者がいなかつたそうですが、ただ一人結節らいの重症者で、中国の戦地から帰つた青年に試験して、劇的な達効を認め、これ以来あれほど我々日本人を苦しめたらい病は、薬で治る病気になつたのであります。

続いて癌の治療薬ナイトロミン、肝臓の治療薬グロンサン等を創成され、また発癌物質などのご研究でいよいよ令名を高めました。

かくの如く絢爛たる教授生活を過ごされ、昭和 36 年に定年退職されて、名誉教授とされました。

しかし先生は、定年後も全くお元気で、大活躍をされました。先生のお弟子さんの一人である、昭和 33 年卒業の池田尊兄に調べて頂いたところ、その後先生のお役職は、国立衛生研究所所長、日本薬学会会長、薬事審議会会長、日本分析化学会会長、日本癌学会会長、食品薬品安全センター理事長、日本薬剤師学会会長、日中医学友好協会会長などでありまして、いかに先生が多方面にご活躍されたかが分かると思います。さらに先生のご令息様が大磯から箱根に疎開され、昭和 16 年卒の安達隆吉先輩がご尽力下さっている〔クリスチャン・アカデミーの〕事業とか、笹川記念保健協力財団理事長（世界のらい撲滅運動）とか、このほかにも沢山あると思われます。種々の賞も受けられました。…

さて次に、石館先生の同志会に対するご貢献について申し上げます。

同志会は、明治 35 年（1902 年）阪井徳太郎先生によって創立されました。そうして昭和 20 年（1945 年）終戦までの 43 年間は阪井先生の庇護のもとに運営されました。そうして終戦から、数年前の故村

上悠紀雄理事長のご就任まで約 43 年間は石館守三先生の庇護のもとに運営されてきました。…

石館先生はご自分の属される白山教会の中に、七灯塾という同志会に似た学生寮を経営されておりました。…しかしこの学生寮も白山教会と同時に戦災で焼失しました。丁度その時、ご高齢の上に終戦時の財閥解体のあおりを受けておられた阪井徳太郎先生に代わって危機に瀕していた同志会の経営に、その強大なお力を注いで下さったのだと存じます。

最近の同志会の改装も、石館基金 1 千万円を取り崩して可能となったものですが、これなどはほんの 1 例で、長い間に石館先生にお金を出して頂いたことは、それこそ数えきれない回数であったと存じます。…そうして昭和 42 年現在の寮舎になった訳ですが、その時も先生の莫大なご寄付があったことと思います。その他いわゆるランニングコストといいますか、毎月の暮らしの中で、同志会は常に多かれ少なかれ経費を必要としておりましたが、それは常に先生のポケットマネーに負っていたと言ってよいと思われまふ。即ち先生の庇護のもとに運営されてきたと言ってよいと存じます。

阪井徳太郎先生、石館守三先生が、共に誠に桁外れのお金持ちであられたことは周知の事実です。阪井先生は三井の重役でしたし、石館先生は上述のように、ビタカンファの開発者でした。しかし世の中にはお金持ちになればなる程、寄付にはお金を出さない富豪も多い訳です。先生が同志会のために長年にわたって、惜しみなくひっきりなしにご寄付下さった事は、同志会のご恩に浴した者たちにとって、誠に感謝にたえない所でございます。

先生は同志会でキリスト教に接せられ、ミス・モークのバイブルクラスから白山教会に行かれ、又内村鑑三先生の聖書講話にも行かれました。…

戦災に危うく焼け残った先生のお宅の子供部屋は、改造されてキリスト教の伝道所となりました。実業界を去られて伝道者となられた大正12年卒小西芳之助先生を牧師として迎えるためです。石館会長も必ず月1回お説教をされました。ここで多数の内外会員が信仰のご指導を受けました。

また先生は卒業生をご自宅に招いて御馳走して下さい、温かい激励のお言葉を下さいました。私もその時「磯野君も命がけで研究しなければ駄目だよ」とおっしゃられたのを覚えております。

以上述べましたように、長い年月にわたって、精神的にも物質的にも同志会に対して、絶大なご貢献をして頂きました石館守三会長先生に、改めて同志会を代表して、深く深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

(平成5年5月15日 石館会長感謝会 中野サンプラザ)